



一般社団法人
大学女性協会
東京支部会報

- TOMOSHIBI -
Journal of Tokyo Chapter
Japanese Association of
University Women
<http://www.jauw.org>

大学女性協会創立70周年

東京支部の思いを新たに

支部長 中山 正子

2015年度の東京支部の主な事業として、終戦70年という節目の年に合わせて、「ともしび」特別企画の文集『昭和二十年八月十五日あの頃わたしは』を発行いたしました。皆さまから寄せられた手記は、まさに戦中戦後を生きた少女たちの戦争証言となり、JAUWの中にとどまらず、人の手から手にわたって、広く多くの方にお読みいただきました。国会図書館をはじめ、関係女性団体や大学の同窓会などに保存していただきました。手記の中にもありますように、学徒動員など勤労奉仕の日々を送っていた女学生たちは、終戦を境に、ようやく未来に夢をいだくことができるようになって、向学心に燃えたことでしょう。

今年、JAUWは創立70周年を迎えます。終戦からわずか1年後、高等教育を受けた女性たちによって、大きな使命感を持って創設されました。中でも奨学金事業は活動の大きな柱として今日に続いています。

東京支部チャレンジ奨学金事業も4年目、チャレンジ精神あふれる素晴らしい女子学生との出会いは、私たちの大きな喜びとなりました。

初山奈々子さんにチャレンジ奨学金を贈呈



JAUW国内奨学金事業も、昨年度から東京支部で募集・一次選考を担うことで、より身近に感じられるようになりました。また、今年の贈呈式でも9名の奨学生によるスピーチは、大変興味深いものでした。私たちの生活に身近なテーマもあり、もっと詳しく話を聞きたいと思われた方も多いと思います。そして2月、河野明佳さんに南アフリカに関する研究テーマと現状についてお話しいただきました。今後も、若い方たちとの交流の場を兼ねて、奨学生の報告を聞く会を企画いたします。

会員拡大「東京支部+30名へ」をスローガンに募集をしてきましたが、現在「+19名」、5月までもうひと頑張りです。JAUWの活動に賛同してくださる方は、皆さまの周りにきつといらっしゃるはずですよ。ぜひ、お声がけください。

東京支部総会のご案内

2016 4月9日(土) 11:00-15:30

会場：グランドプリンスホテル新高輪 B1「イルレオーネ」

懇親会費：3,500円(東京支部会員は2,500円)

▶ お席は自由です。

▶ 懇親会、講演会には、支部会員以外の方の参加も歓迎します！

PROGRAM

- 第1部 東京支部総会議事(11:00-)
- 第2部 懇親会・会食(12:15-)
ランチとワインでご歓談ください
- 第3部 講演会(13:45-)
「シリア情勢について」
元駐シリア・アラブ共和国特命全権大使
国枝昌樹氏

写真※Gigazine.net (2015.3.20)

グランドプリンスホテル新高輪

国枝氏プロフィール：
1970年外務省に入省。在エジプト大使館、在イラク大使館、在ヨルダン大使館での任務を経て、ジュネーブ軍縮代表部公使、在ベルギー大使館公使、ベトナム・ホーチミン市総領事、在カメルーン大使などを歴任。
著書に、『湾岸危機—外交官の現場報告』(朝日新聞社)、『シリアアサド政権の40年史』(平凡新書)などがある。

Member's ART



「ほっこり信濃路」
水墨画教室会員の作品

文集『昭和二十年八月十五日 あの頃わたしは — 少女たちの戦争証言 —』の発行を終えて

**戦争体験を募ろう！
構想は2年前**

戦後70年を迎えるにあたって
会員の皆さまに戦争の体験を
語っていただく、という構想は2
014年の5月。当初は『とし
び58号』に増ページで掲載予定で
したが、委員会での話し合いで、一
冊の単行本（ともしび特集号）の
形でまとめることになりました。

一人でも多くの方に参加して
ほしい、そう考え、原稿は二つの
タイプに分けました。一つはエッ
セイで、ペンの向くまま、自由に
綴っていただくもの。もう一つは、
紙上インタビュー形式です。日常
的な場面で記憶に残っているこ
とをお話していただくことで、社会
背景と、その方ならではの物語が
浮かび上がります。

募集／原稿が続々と届いて

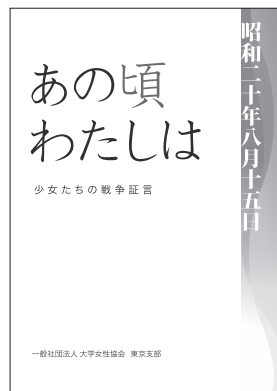
56号で呼びかけ、また同年12月
初めに全支部会員にお願いの文
書を送付したところ、早速、原稿
が届き始めました。当時、まだ少
女だった頃に戦争と向かい合っ
た素直な記憶を思い起こし、心情
あふれるすばらしい原稿ばかり！
編集メンバーは感謝の気持ちで
いっぱいでした。

編集はチーム連携

締め切りの2015年4月に
は、原稿は発行に十分な量となり、
編集委員の連携も頻繁でした。

原稿のとりまとめは会員歴が
長いメンバーが担当。筆者の顔
を思い浮かべながら、手書きから
活字へ変換、また、筆者の方のご
意向を伺いながらの校閲など、全
体の編集が細かく行われました。
また、原稿とともに寄せられたお
写真を掲載することで、より当時
の空気が伝わるようにしました。

誌面の表現は編集デザインに
慣れた者が担当し、読みやすさを
追求しました。文字や行間のサイ
ズから写真の配置など、手に取っ
てページを捲られるとき、人から
人へと繋がるとき、将来を想像し
ながら仕上げていきました。



何度も何度も校正し、終戦記念
日に間に合うよう、7月25日発行
となりました。

**印刷部数の心配と
思いがけない評判**

ところで、何冊印刷したらよい
かが思案の為所。残ってしまった
は経費の無駄ですし、ぎりぎりの
数量では広くに伝わりません。投
稿者を含み総力で文集を紹介し

ていくことにして、700部を発
行部数と決めました。

しかし、支部会員の手に配布
されると同時に注文が相次ぎ、会
員から子や孫へ、同窓会へ、友人
知人、恩師、教え子へ、と繋がり、
また各支部長から全国の会員へ
と広がって行きました。

関係女性団体・NPO法人の
「本の紹介」ページに取り上げて
いただき、個人のフェイスブック
にも掲載され、一般の方からもお
求めいただきました。国立女性教
育会館・国会図書館・区立図書館
に置いていただき、昭和館・新聞
社にも送り届けました。

このように次々と捌けて
700部完売で収支の採算がと
れました。

世代と地域を超えた継承へ

文集はDVDに保存し、千円で
お分けできますので、是非ご利用
ください。

貴重な体験が後の世代に受け
継がれ、「戦後」という時が80年、
90年、100年と続くことを願っ
てやみません。



関連団体による文集の紹介

公益財団法人市川房枝記念会女性と
政治センター情報誌「女性展望」11・12
2015「Book Report」

●手記には、ひたすら時局に従った勤労
動員の様子や轟沈ゲームを取り入れ
た算数の授業、弁当泥棒、千人針、疎開
食糧事情；、敗戦後は教科書の黒塗り
やシベリアのことを一切話さず亡く
なった父親のこと、そしてどのように
戦後の生活がはじまったのか、それぞ
れの実体験が綴られている。そして戦
後70年のいま、戦争に翻弄され続けた
少女時代を振り返り、教育に対する問
いや、平和の尊さを語り継ぐ。（抜粋）

NPO法人高齢社会をよくする女性
の会（樋口恵子理事長）会報 No. 243
2015年9月発行「本の紹介」

●寄せられた声は、期せずしてあの頃
の少女たちの戦争証言となりました。
た。「再びあのような悲惨な戦争を
繰り返してはならない」、次の世代へ
戦争を語り継ぐきっかけとなること
を願っています。（抜粋）

独立行政法人国立女性教育会館情報課より
●当会館内にあります「女性教育情
報センター」（図書館）では、女性・家
族に関する分野の国内外の資料を
収集・提供しております。ご刊行に
なりました資料を当センターに受け
入れ、広く利用に供したく存じます。

寄せられた感想より

♥

不思議なともいふべき二人の少女の出会いの物語、細やかな実態が語られることがなかった私どもより年上の方々の工場体験、理知的できりりとけなげな女学生たちの証言です。…丹念なアンケートをまとめた紙上インタビューの部分もほかにあまり例を見ない企画で本書の大切な部分です。メディアにはいろいろな思い出が語られ、記録されていますが、本書にはユニークな視点と雰囲気があります。戦争のこととはかならずしも関係なくとも、とくに第二波フェミニズムの代表的な方が時折女性についてすべて自分たちから始まったというような言い方をされることがあるので、私たちはthe silent generationだなあと思うこともあるのですが、その空白感を埋めるものでもありました。(会員 SE さん)

◆皆さんの手記やインタビューは、とても辛く受け止めながらも、でも、どこか懐かしく、父や母、祖父や祖母、姉たちなど、ふるさとを思い浮かべてしまう瞬間瞬間の連続でした。子どもであれ、少女であれ、学生であれ、多くの苦しみや悲しみや息苦しさが、皆さんの胸に深く残っていることを共有させていただくことが出来、同時に平和であることを、今とても有り難く感じました。(岡山支部会員 TTさん)

◆当時6歳の私、父は軍医として南方へ、母と弟と疎開した群馬の山奥で山や川、田んぼでたにし取り、桑の実のおいしかったこと。ほとんどじやが芋ばかりの食事そのことへの不満はありませんでした。体中出来物だらけ、母の苦勞はいかばかりであつたかと、思い出すのもイヤだと語ることはありませんでした。思い返す契機をいただき感謝しております。(仙台支部会員 RWさん)

♥『昭和二十年八月十五日あの頃わたしは―少女たちの戦争証言―』を拝読し、それぞれが終戦を迎えられたのだなと感じました。戦争を体験した少女たちが経験談を語ることによって、戦争は二度としてはならないとの思いを共有できるのだと思いました。私は、戦争法案の廃案まで頑張ります。(一般男性 JNさん、フェイスブックを見て購入)

◆私は昭和35年生まれです。一人娘が大学に入り、少し落ちつき、自分史の教室に通いました。母、祖母の話の聴き、女子の目から見た戦争についてもっと知りたい気持ちで、この本を購入いたしました。とても購入してよかったです。子供を育ててみて、それが戦時中であつたらどんなに大へんであつたらうと思ひます。私の母は昭和9年の生まれで、やはり同世代の人たちの文章はとても興味深く読みました。自分たちは恵まれていたと思ひ、その事実を娘に伝えていきたいと思ひます。(一般 HIさん、高齢社会をよくする女性の会)

私の戦後

―女性の活躍に目覚めて―

大阪支部会員 青木綾子

此の度東京支部におかれましては『あの頃わたしは』の文集を発行され当方にも大阪支部からお贈り頂きゆつくり読ませていただきました。

皆さまの貴重な記事が現在も又次世代にも読み継がれることは大変有意義なことでありご同慶の至りでございます。

私は現在91歳になりますが、健康に恵まれ書道教師を続けております。小学校に入った時から満州事変が始まり以来戦時中でした。

山陰の女学校を卒後、上京し学生生活、昭和18年10月神宮外苑で出陣学徒壮行会に参加、昭和19年9月繰り上げ卒業、母校に帰り教鞭、終戦となり、戦後の教育にとまどいもありましたが、苦難を凌いで平和な日本を築いたことは素晴らしいことだと自負しています。

女性の活躍に目覚めたのも戦後でした。その頃大学婦人協会を知り入会して多くの友人と活動に参加させて貰いました。私の人生にとって大きな転機であり、自らを成長させていただいたことに感謝致します。

私が大阪支部長をしていた頃、東京支部の方々には大変お世話になりました。当時のことを思い出しながら厚くお礼を申しあげます。

『あの頃わたしは』

読後感を話し合う会

―長崎支部で―

長崎支部長 鈴木千鶴子

終戦記念70周年の夏、長崎支部では会員全員に東京支部の証言集を購入、9月3日に、東京支部から移籍された加納会員のご自宅に遠方と職務中の会員を除いて集い、その時期でしか持ちえない、次のような語らいを共有しました。

①体験者の生の声を記録したものである故に、出版物自体が一つの重要な歴史を形成している。

②どの証言もそれぞれ、その歴史の貴重な部分を成し、人間・日本人・女性の普遍的な真理を伝えている。

③多くの人が疎開によって生かされ、今に至り証言できた経験を通して「自然の恵み」「人との繋がり」が人間の命を支えることを実感。

④終戦時の年令や場所も多様な参加者それぞれの体験を基に、証言とまさに呼応する面、および原爆後の長崎の特有な状況を交換し、戦争の恐怖と罪深さを改めて確認。

したがって、二度と繰り返さぬ必要が強調され、翻って現在の我々の政治・社会に対する甘い姿勢を正した。

東京支部チャレンジ奨学金

2015年度チャレンジ奨学生に
 初山奈々子さん（慶應義塾大学環境情報学部3年）が決定しました。奨学金贈呈式をJAUW事務所で1月16日（土）に行いました。初山さんは2009年慶應義塾大学文学部を卒業後、日本電気株式会社に入社、コンピュータを扱う仕事をしていましたが、さらに専門的な知識を得たいと考えて、2015年に退職、情報系の学部に進学して現在に至っています。コンピュータサイエンスの基礎やプログラミングのスキルを学び、卒業後も再びコンピュータシステムに関わる仕事に就きたいと希望しています。

東京支部国際奨学金

フィリピンのミンダナオ島ビライン民族のジェニリン・ヌガイさん（ジェネラルサントス大学4年）に支給しています。ジェニリンさんから「長くサポートしていただいて、ありがとうございます。3月には卒業の予定です」とお礼の手紙が届きました。お世話くださったNPO法人「ビラリンの医療と自立を支える会」の山崎登美子さんから「ご報告がありました。」

「江戸の食を味わう会」レポート

料理のこころ

武内道子

「人は食べるために生きるに非ず、生きるために食べるにあり」と大見得をきるまでもなく、「食」は古今東西の日常的営みである。今の私たちの食の原点を考えると、食文化の基礎は江戸時代に築かれたと考えていいらしい。庶民にもたやすく季節の食材が手に入り、数多くの料理書が出版され、料理法もさまざま生み出され、同時に外食店も普及したという。今私たちが享受する握りずし、鰻のかば焼き、てんぷら、そばなどの食文化は江戸後期のもので、一方、ご飯に汁と二三のおかずで漬物という日常的な献立が確立するのも江戸時代である。

以上の知識は「楠公レストハウス」の総料理長安部憲昭氏の講演から得た。時は白い影ひとつないまぶしい光一杯の昨2015年11月初旬、場所をはかつての徳川將軍家の居城の一角「皇居外苑」の中である。



与の重

楠公レストハウスが食を通しての社会貢献と謳って2007年に

スタートさせたEDO・ECOというクッキングプロジェクトに、東京支部会員31名と支部招待の本部国際奨学生レーナさんが参加した。

江戸の食文化をひとことで言うエコ・クッキングである。旬の食材を、無駄なく使いきり、桶に汲み取った水で手順よく片づけるというのが三段跳び料理の知恵であった。「旬」という考えは、海のもの、山のものという多様性と自然を大切にすることに支えられ、季節感と栄養バランスにあふれる。「はしり」「旬」「なごり」、すなわち、その食材に出会ったことを喜び、今のおいしさを堪能し、来年の再びの出会いへの期待をも楽しむのである。

料理書には分量や作り方の記述はないが、食材と調味料の記述はある。私が心に残っていることは、味の原点は調味料を沢山使わない、特に砂糖を使わない（お菓子のみに）と記述されているという話である。使わないことだとたとえば野菜の甘み（うま味）が残されると聞いたときはなるほどと思った。

実際に江戸エコ料理を開発した与の重の行楽重をいただいた。五味（苦味、酸味、甘味、辛味、塩味）、五法（煮る、焼く、蒸す、揚げる、生）、そして五色（赤、白、黄、青、黒）が揃い踏みした、江戸の行楽弁当である。どれも薄味でありながら、目に美しく、素材のうまさ際立ち、手間と工夫に裏打ち

されている。極めつけのひとつ、「煎り酒」という刺身を食す調味料は、鰹節、梅干し、酒を煮詰めたもので、醤油の黒さになれている目には何とも頼りなげに見えたが、刺身やつまのうまさを舌に残すものであった。

インスタントもの、早く簡単にできること、濃いめの味が好まれるご時世だが、料理は手間暇かけてこそ、素材調理、盛り付けすべてに手間と工夫を惜しまない精神こそがおいしい食を作るということであろう。いたたく側は、口、舌、目、鼻で、そして何よりこころで食する。喜心、老心（親切心）、大心（寛容の心）という三心を育てることが料理のこころとの安部氏の言に、先人の心意気を見、まさに人を作る基本は食にありと納得した。



安部総料理長から江戸の食文化の講話

● 東京支部にこんな方が ●

三浦まりさん

―ジェンダー平等の実現に向けて―



「Qの会」(クオータ制を推進する会)の広報で知り、10月12日、お茶の水女子大学で開催された国際シンポジウム「女性のリーダーシップと政治参画」に参加しました。第一部「世界におけるクオータの潮流」のまとめ役をされたのが、JAUW東京支部会員の三浦まりさんです。

日本では意思決定における女性の参画は未だ極めて低い水準に留まり、とりわけ政治分野においてリーダーシップをとる女性の割合は、ジェンダーギャップ指数で136カ国中105位となっています。世界の潮流は今やクオータから「男女比50・50」を目指しています。

『ジェンダー・クオータ：世界の女性議員はなぜ増えたのか』の共著もある三浦まりさん(上智大学法学部教授・政治学、「Qの会」顧問)にコメントをいただきました。

まず最初に、政治学に取り組まれたきっかけは？

個人の生活に政治が直結しているのに、政治学はそれをまともに取り扱おうとしないことに不満を持って、政治学の世界に入ることになりました。

日本は女性議員が少ないのは何故でしょうか？ 女性議員が増える何がメリット？

家族の支援や経済的資源が得られにくいことが背景にあります。最大の要因は候補者を探し出す役割を担う政党が男性中心の発想から脱却できていないことです。

女性議員を増やそうと努力することで、男性優位の政治文化が変わる可能性が開けてきます。女性蔑視、性差別、性暴力などの問題は女性議員が中心となって変革を迫る分野です。さらに女性がケア労働を引き受けている現状では、子育て、介護などの政策やワークライフバランス政策の進展も見込めるでしょう。

クオータ制を設けることと、その戦略について

「Qの会」の呼びかけにに応じて超党派の議連が発足し、昨年8月には政治分野における男女共同参画に関する法案骨子がまとまりました。候補者擁立にあたって男女同数をめざすことが基本理念です。この法案を次

期国会で可決し、その下で各党がクオータを実施することが大切です。世界140カ国でクオータが実施されている現在、それなしで世界平均に追いつくことは不可能だからです。

ご意見ありがとうございます。三浦まりさんの、今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

―「Qの会」について―

「Qの会」を知っていますか？

「クオータ制を推進する会」の略称が「Qの会」です。クオータとは、「4分の1」を意味するQuarterではなく、「割り当て」という意味のQuotaのことです。

政府は、男女共同参画社会基本法に基づき、「2020年までにあらゆる分野において指導的地位の女性比率を30%にする」と決定し(2005年)、そのためにクオータ制を明記し、積極的改善措置(ポジティブ・アクション)を推進することを政党に要求しています(2010年)。

呼びかけに応じてJAUWも賛同団体の一つとなり、2012年に「Qの会」が発足、政治の分野におけるクオータ制を推進する活動に参加しています。

(支部委員 鷺崎千春)

JAUW国内奨学生

―東京支部推薦の奨学生たち―

東京支部推薦の次の4名が、JAUW国内奨学生に選ばれました。1月9日(土)の「新春のつどい」贈呈式で、中村久瑠美会長から奨学金が授与されました。

- ホームズ奨学生
李 美奈 東京大学大学院人文社会系研究科
- 一般奨学生
河野明佳 津田塾大学大学院国際関係学研究科
鈴木裕子 東京学芸大学大学院教育学研究科
- 社会福祉奨学生
花岡恵梨香 津田塾大学大学院理学研究科

どの奨学生も研究テーマと将来の夢を生き生きと語り、今後ますますの活躍が期待されます。

なお、東京支部では2月27日(土)に、河野明佳さんの講演会を本部事務所で開催しました。研究テーマ「南アフリカにおける民族とパンツスタン政策」について、またフィールドワークによるホットな現地の情報などをお話しいただきました。詳細については次号の「ともしび」に掲載します。第32回GWI(旧IFUW)総会が今年8月に南アフリカのケープタウンで開催されることもあり、大いに参考になったと思います。これからも支部推薦の奨学生を招き、それぞれの研究分野での成果を発表する講演会を企画したいと思っています。

ともしび俳壇

東京支部会員からの投稿俳句と、
交換句会を通して交流のあった札幌
支部からの寄稿を掲載します。

●東京支部の俳句 五十音順●

岩田 玲子

強東風に背を押されて迷ひ坂
地に足のつかず小走り師走かな

加藤 恭子

秋暑し病床の時遅々として
ビルの上初冠雪の富士浮かぶ

小池 朋子

蟻潜る大藁草履の藁の波
柚子の香のほくるるやうな師の一語

坂井 英子

ふくろうの鳴く声寂し木曽の夜
梨の実に越後の風を味はひぬ

坂上 栄美子

結界は除染半ばの青峠
日向ぼこ本と私が溶けてゆく

佐々木 澄子

手で揺らし古の香や藤袴
強東風に艦網鳴らす船溜まり

野瀬 久美子

銀杏の黄平和公園染め変えて
宮島の平家盛衰紅葉散る

端本 和子

霜柱レモンの固さ確かめて
名も知らぬ神社や後の月掲げ

山崎 邦子
敗戦の虚脱のしじま百日紅
身に沁むや銃後のはなし読み耽けて

丸山 庸子

落日を受けて川岸の草紅葉
生きた道振り返りおり秋灯

●札幌支部の俳句 季節順●

高橋 房子

成人の日の白雲の耀けり
鈴木 千佐子

青麦の青の隣で深呼吸

根本 絢子

雲上の夜明けを見たり春の旅

佐々木 幸

リズム良き女子学生のヨット群
出口 好子

橋本 素子

沙羅咲いて中庭の椅子ひとつ増え
地の闇の殊さら美しき星月夜

村上 和美

鬼灯揉む少女の指のリズミカル
咳三つ四つ幼子母を呼ぶ

加藤 好江

一閃のグリーンフラッシュ神無月
雪国の運河に灯る硝子玉

根上 節子

札幌支部の俳句同好会は、発足して十九
年。佐々木幸会員の指導のもと、月一回の
句会です。北海道の風土と季語との差に戸
惑う時もありますが、それも又楽しみの句
作です。合同句集『出逢ひ』は昨年七月に第
四号を発行しました。

会員寄稿

私がダンスにはまったわけ

岩村 道子

私がダンス、それも社交ダンスとい
われるものと初めて出会ったのは、大
学を定年退職直後のことでした。3
月31日までに研究室にあったすべて
のものを片付けて、4月になると私は
自分の住まいで茫然としていました。
幸い科学研究費はその後2年間獲得
できたのですが、自分の研究室も学生
もない居候の身分では、これまでの
研究を細々と継続することだけが可能
でした。そのつらさでこのままではも
うじき定年うつ病になってしまいそう
と感じておりました。

そんな折、5月末の守田科学研究奨
励賞贈呈式で委員の八木江里さんに
「あなたの家の近くで車いすダンスを
やっているから来てみない？」とお誘い
を受けました。物理学者の八木さんは
社交ダンスの名手です。運動特にダン
スは私が最も避けてきたものですが、
その頃は追い詰められていたのでおず
おずと出かけてみました。しかし車い
すダンス教室は社交ダンスの熟達者と
車いすの人が楽しく踊る場で、私がい
られる世界ではありませんでした。そ
こで、八木さんが通われているダンス
教室を紹介していただきました。

最初の数カ月は人に見られたら恥

ずかしいと辺りを見回してこっそり教
室に入りました。それほどこれまで
とかけ離れた世界はたいへん刺激的で
頭の中が真っ白になり、これをやって
いれば「うつ」にならないで済むと直感
しました。運動神経ゼロの私に先生は
てこずっています。私は厭きること
も嫌になることもなく10年近く「は
まって」います。モダン先生にしか
りホールドされていろいろ注意される
のに我慢できなくて、最初からラテン
一筋でやっています。

「片足で爪の先に立つ」「上体は動か
さず下半身だけ使う」「肩甲骨を外に
はがして身体の芯だけ回す」などとい
う私には想像を絶するようだった踊り
の基本が少しずつわかりかけてしまし
た。それが魅力です。年一度のデモンスト
レーションのために新しい振付とテク
ニクを必死になつて習得するのも楽し
みの一つです。この先いつまで頑張れ
るかなと心配しつつ、とにかく今日明
日だけはやってゆこうと思っています。



サンバのリズムに乗ってデモンストレーション

J A U W 国際奨学生寄稿

東京支部では、J A U W 国際奨学生レーナ・エーロライネンさんを支部行事や新春のつどいに招待し、日本での生活について、上手な日本語で書いていただきました。原文の抜粋です。

日本に暮らして

レーナ・エーロライネン

中学生のころ完全に「ファイナルファンタジー」というゲームにハマって、初めて「日本」という国の存在を意識しました。そこからアニメと漫画はもちろん、Gacktの音楽も好きになった。高校生の時日本に留学して日本語を勉強し始めました。そして大学に入って、さらに勉強が進み、これからは「日本語で仕事をすること」を目指します。日本語は奥が深いので、これからは頑張ることがいっぱいあります。

日本での生活は非常に充実しています。自転車で東京の道を走って、毎日新しいことが発見できる。そして、仙台、九州、四国といったようなところも初めて行くことができます。単なる旅行だけではなく、日本研究者にとつて理解を増やすような不可欠な経験です。趣味は筋肉トレーニング、登山とハイキングです。フィンランドに山がありませんから、とても惹かれています。山ガールを目指します。(笑)

私にとって早稲田大学で研究できるのは最高のことです。英語にせよ、日本語にせよ、図書館へ行けば必要な参考文献はすべてあります！毎日共同研究室に引きこもっています。

私の研究は、日本の怪奇映画における怪物像、「変身から変心へ」というテーマです。最も興味があるのはいわゆる「普通サイズの怪人」、つまり人間の怪物化ということ。これも、人間の心の働きを理解しようとする試みの一つだと考えられます。私たち人間の心という謎をこれから少しずつ解いていきたいと思っています。大学で教えるのが夢ですが、日本人を対象にしたフィンランドでのウェディングサービスの創立したいとも思います。あくまでも文化交流によって人を幸せにしたいと思っています。



山ガールを目指して
高尾山から陣馬山に向かう

J A U W 主催支部交流・親睦旅行 広島親睦旅行に参加して

奥津 成子

昨年11月15日から16日の1泊2日の親睦の旅を中村会長ほか20名で行った。広島に到着が12時一寸過ぎで、駅から広島名物お好み焼きの店がひしめく会館に直行、山盛りのお皿にまずは広島を味わった。食後すぐバスで広島呉街道を呉の大和ミュージアムへと向かう。この街道は海に沿って、戦中派の私にとつては憧れの的であった海軍兵学校のあった江田島が車窓の右に見え隠れし、呉が海軍の町であったことを改めて感じさせられた。ミュージアムは江田島と同じく特殊潜航艇の九軍神、戦艦大和等々全てが、私の過去の思い出と結びつき感銘深かった。

広島に戻り平和公園に向かう。広島市の市街を通ると原爆を投下された地であることは考えられないよう見事に復興されているが、一瞬残されたビルの壁跡、塀の窪みなどハッとするようなものが目に入った。記念公園はあまりにも作り上げられ過ぎたように私には思えた。二度目の見学であったことで、初回のほうが荒削りではあったが訴えるものがあつたように思われたのかもしれない。夜は市内の料亭で広島支部の方々と会食、歓談となった。生ガキを楽しみにしていた私には、その無いことにいさ

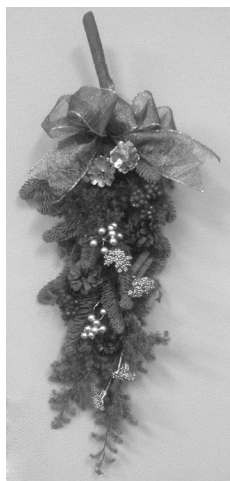
さがつかりではあったが実のある会となった。

二日目早朝から岩国錦帯橋を見学。絵や写真で見える見事な姿の橋を渡り、宮島口から船に乗り厳島神社に向かった。前回来た時も神社の周りの海が汚れていると思う、今回もまたと思ったら、これは海草だそうで認識を改めた。平成盛の信仰篤き神社で可愛い花嫁さんの結婚式などを横目で見て、棧橋までの帰途、昼食を道筋の料亭でとる。カキと穴子ご飯が広島名物と聞かされており、この店のアナゴご飯、カキフライは広島と感じられた。帰りは私たち4人は神戸に行くため船から降りて単独行動となったが楽しい二日間だった。幹事の皆様方、広島支部の皆様方に心より御礼を申し上げ、食いしん坊の報告を終了する。



厳島神社で記念撮影

フラワーアレンジメント講習会 クリスマスドア飾り作り



今年度も11月26日に本部事務所で河井尚子委員の指導で、「クリスマスドア飾り」を制作しました。参加者は7名でしたが、大きなテーブルいっぱい材料を広げ、樅と杉の爽やかな香りに包まれて取り掛かりました。初めこそ「先生、うまく形ができません」と不安気に先生の手ほどきを順番待ちしましたが、一旦要領を覚えるとさすがJAUWのメンバーは違います。器用に樅と杉で立体的なツリーを作り、次々に松ぼっくりやサンキライ、姫りんごや金銀の小さな木の実を飾り付けていきます。ニッキ棒を新に見立てて組んだオーナメントが、香りも良く洒落ていてとても素敵です。手が動きだすと、口も軽くなり、自然と楽しいお喋りが始まりました。日頃の悩みを思わず打ち明けると、「人生、なかなか思い通りにならないものよ。気の持ちようね」と経験豊かな先輩が答えてくださいます。楽しい時間を共有して、こんな井戸端会議的なフリートークの集まりがあってもいいなと思ったことでした。先生が色とりどりに揃えてくださった綺麗なリボンをつけて出来上がり。先生から「皆さん、ご自分のが一番いいわと思っていらっしやるでしょう！それでいいのです」とお褒めの言葉。2016年もこのように楽しい企画にお誘いしたいと思っています。



手も口も軽やかに

サークル案内

●源氏物語を読む会(Ⅱ)

・第三・第四火曜日

午前10時半～12時

・津田塾大学同窓会・会議室

・講師・坂上栄美子会員

・連絡先・中山律子

☎(03)3336-4628

「明石」を再読しています。

●源氏物語を読む会(Ⅲ)

・第二・第三水曜日

午前10時半～12時

・津田塾大学同窓会・会議室

・講師・坂上栄美子会員

・連絡先・小池朋子

☎(045)902-9730

「明石」を読んでいます。

●水墨画教室

・第二木曜日

午後一時半～三時半

・JAUW事務所会議室

・講師・日高絹子(絹紅)会員

・連絡先・森川淳子

☎(045)583-3430

2015年度 東京支部新入会員

氏名 出身校

太田 恵子 青山学院女子短期大学

矢口 有乃 東京女子医科大学

(敬称略)(50音順)

お悔やみ申し上げます

平田 康子様 2015年7月29日

ご逝去

西村 章子様 2016年1月3日

ご逝去

お詫びと訂正

前号のチャレンジ奨学金の記事で、谷津都萌子さんの紹介文に「保険」とあるのは「保健」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

ご寄付いただきました

ありがとうございました

(敬称略)

源氏物語を読む会(Ⅱ)

一万円

源氏物語を読む会(Ⅲ)

一万円

水墨画教室

五千元

文集出版に際してー

五十嵐康子、小澤紀子、中村久瑠美、東山セツ子、山下玲子、増淵民子(栃木支部)、山下いづみ(静岡支部)

支部からの連絡

◇住所等の変更はお知らせください。

◇中野区視覚障害者福祉協会支援の使用済み切手を事務所までお送りください。

◇会費未納の方はお早目にお願います。

◇91歳以上の会員の会費は免除することができま。お申し出ください。

《編集後記》

皆さま原稿依頼を快くお受けくださって、「ともしび59号」ができました。

文集につきましては、ほかの支部からまた一般の方からも感想をお寄せいただきました。ともしび俳壇には札幌支部がご協力くださり、本部企画の広島親睦旅行の報告も含めて、「ともしび」紙面で思わぬ支部交流ができました。深く感謝申し上げます。

(編集担当 鷺崎千春&進士多佳子)

ともしび 第59号 発行日：2016年3月4日

編集／発行：一般社団法人大学女性協会東京支部 〒160-0017 東京都新宿区左門町11番地6-101

Tel:03-3358-2882 Fax:03-3358-2889 Email:jauw@jauw.org (JAUW ホームページ: <http://www.jauw.org>)

制作協力／印刷：株式会社 繁松

※「ともしび」は会員のための情報誌です。外部に向けた転載、引用などは事務所までご一報ください。